

1. 学校概要	
フリガナ 学校名	ミナミクオヌマシリンイカザワ ショウガッコウ 南魚沼市立五十沢小学校
全学級数	6学級
全児童数	79名
全教職員数	11名
活動体験の観点から見た 学校環境	山、川など、豊かな自然に囲まれた、田園地帯である。自宅が農業を営んでいる児童もいるが、農業体験のある児童は少ない。 豪雪地である。
連絡先	住 所 新潟県南魚沼市原331番地1
	電 話 番 号 025(774)2059
	FAX 番 号 025(774)2082

2. 活動に関する学校の全体計画	
対象学年・児童数	第5学年・19名
実施時期	平成21年10月19日(月)～10月23日(金)
活動場所	新潟県妙高市
活動のねらい	(1) 仲間や周囲の支えを受け、自分の思いや願いの実現に取り組む。(生活の自立) (2) 自然を生かし豊かに暮らす杉野沢の人々の知恵からの学びを通して、ふるさと五十沢と自分のかかわりを改めて見つめ直すきっかけとする。(暮らしから学ぶ) ※本校の児童は三世代家族で生活していることが多く、たくましさに欠けるため、自立が重要であるとした。
児童一人当たりの概算費用	児童一人当たりの費用 40,070円 事業費助成(文部科学省) 32,440円 保護者負担 7,630円

平成21年度における「子ども農山漁村交流プロジェクト」取り組みに関する調査票

体験活動名	全活動時間 (時間)	教育課程上の位置づけ	児童の活動内容
お願いの手紙を書こう	1	国語	お世話になる民宿の方々に自分を紹介する手紙を書く。
妙高アドベンチャー	4	体育	活動をとおして人と人がかかわりながら、生きる力と豊かな心を育み成長を促す活動を行う。
秋の星座観測	1	理科	月や星座の観察をし、天体の美しさを感じ取る。
収穫体験学習	2	総合的な学習の時間	高原トマトの収穫作業を体験する。収穫に至るまでの農家の苦勞や工夫を学ぶ。
農家民宿ホームステイ体験	10	総合的な学習の時間	民宿に宿泊し、民宿の仕事や農作業の手伝いを行う。
民話を聞く	1	国語	杉野沢地区に伝わる民話を、地区の語り部から直接聞く。
郷土芸能鑑賞	2	総合的な学習の時間	杉野沢地区に伝わる郷土芸能「春駒」を鑑賞・体験する。
民宿ホームステイ振り返り	6	総合的な学習の時間	ホームステイで体験したこと、感じたことを振り返り、まとめる。
キャンプファイヤー	2	特別活動(学級活動)	ファイヤーのまわりで歌や踊りやスタンプを行い親睦を深める。
記念品づくり	4	図画工作	妙高ならではの素材を使つての制作活動
お礼の手紙を書こう	1	国語	お世話になった方々にお礼の手紙を書く。
宿泊体験報告会	6	総合的な学習の時間	民泊グループごとの体験発表会をする。
妙高体験記録集作成	4	国語	体験したこと、学んだこと、自分の成長を記録に残す。

3. 活動内容

事前指導	(1) 活動の概要説明及び班での役割分担や目標の設定 ・目標に即した振り返りの視点を明確にしたカードの作成 ・自立を促す環境としてのグループ編制(あえて普段仲が良いわけではない児童同士を2名ずつ組み合わせて民宿に宿泊させた.) (2) 宿泊先へのお願いの手紙作成 ・児童の手紙と顔写真を事前に届ける。 (3) 養護教諭による保健指導
事後指導	(1) お世話になった方々へのお礼の手紙を書く。 (2) 宿泊体験報告会を実施 (3) 妙高体験記録集を作成

宿泊先

地 域 名	施 設 名
新潟県妙高市	民宿田端屋、アルファイン秀雲荘、白銀館・空飛ぶウサギ、やまきや、はるみ荘、ナチュラルイン翠山、高原の宿夢冒険
新潟県妙高市	国立妙高青少年自然の家

平成21年度における「子ども農山漁村交流プロジェクト」取り組みに関する調査票

日程					
1日目 (10月19日)		2日目 (10月20日)		3日目 (10月21日)	
08:15	出発式	06:00	起床	06:00	起床
11:00	開校式	07:00	朝食	07:00	朝食
12:00	昼食・休憩	08:30	杉野沢に移動	08:30	農家民宿ホームステイ
14:00	妙高アドベンチャー (子ども達が協力しなければ達成できない活動)	09:10	農業体験		民宿手伝い・苗名滝見学
17:30	夕食	11:30	民宿の方々との対面式		昔の農具、スキー用具見学など
19:00	星座観察	12:00	昼食・休憩	12:00	昼食
20:00	入浴	14:00	農家民宿ホームステイ	13:00	民宿手伝い・苗名滝見学
21:00	振り返り		民宿手伝い・苗名滝見学		昔の農具、スキー用具見学など
22:00	就寝		昔の農具、スキー用具見学など	17:00	夕食作り・夕食
		17:00	夕食作り・夕食	18:30	郷土芸能「春駒」交流会
		19:00	民話	20:30	入浴
		20:30	入浴	21:00	振り返り
		21:00	振り返り	22:00	就寝
		22:00	就寝		
4日目 (10月22日)		5日目 (10月23日)		6日目 (月 日)	
06:00	起床	06:00	起床	/	
07:00	朝食	07:00	朝食		
09:00	民宿の方々とお別れ式	08:30	記念品づくり (妙高のシラカバを使って、20才になった自分に宛てた手紙)		
09:30	移動	12:00	昼食・休憩		
10:00	宿舎整理・活動の振り返り	13:00	閉校式		
12:00	昼食・休憩	13:30	自然の家出発		
13:00	オリエンテーリング				
15:00	活動の振り返り				
17:30	夕食				
18:30	キャンプファイヤー				
20:00	入浴				
21:00	振り返り				
22:00	就寝				

4. 体験活動の実施体制

(1) 学校の指導 (支援) 体制

- (1) 初めての長期宿泊体験であり、保護者から十分な理解を得るため、4月と9月に保護者説明会を実施した。9月の説明会では、学校側だけでなく、国立妙高青少年自然の家の職員や妙高市グリーンツーリズム推進協議会の方からの説明も行った。
- (2) 学校、国立妙高青少年自然の家、妙高市グリーンツーリズム推進協議会3者での事前打合せ会を実施した。
- (3) 5日間の引率の交代は行わなかった。
- (4) 上越教育大学教職大学院学校支援プロジェクトの学生の協力を得、子どもたちの活動に寄り添い、支援にあたりとともに、記録・写真をとってもらった。

(2) 配慮事項等 (安全確保のための改善点、衛生上の留意点等)

- (1) 安全確保
 - ①学校、国立妙高青少年自然の家、妙高市グリーンツーリズム推進協議会3者での事前打合せ会の際に、安全面についても十分協議した。
 - ②事前下見を行った。
 - ③緊急対応時の連絡系統や医療機関などを事前に十分確認した。
- (2) 衛生上の留意点
 - ①事前に保健調査を行い、必要な事項を各民宿にも連絡した。
 - ②民宿での調理等では、十分な手洗いや衛生管理を行うよう、児童に事前指導するとともに、各民宿にも要請した。

5. 活動の成果

- (1) IKR評定用紙による「生きる力」のアンケートより
 - 事前・事後に実施した結果、積極性、自己肯定感に数値の向上が見られた。
- (2) ふるさと五十沢を改めて見つめ直すことができた。
 - 郷土芸能「春駒」を守り受け継ぐことに誇りをもっている杉野沢の子どもたちと接し、改めて、五十沢の誇れるものは何だろうと考える活動を行うことができた。

6. 保護者からの声

- (1) 今までの手伝いは約束でやっていたことでした。4泊5日の宿泊体験活動をおこなってからは、自分から「やることある？」と進んで手伝いをするようになりました。
- (2) 田舎に住んでいても農家ではないので畑や田んぼの体験はできません。家の手伝いもつつい親が手出ししてしまいがちですが、民宿の方から教えてもらって自分でやってみるとい体験ができました。とても貴重な5日間でした。

7. 児童からの声

- (1) 妙高でいろいろな体験をしてとても楽しかったです。もう一度妙高に行きたいです。いろいろな山や滝、とても感動しました。あと5日いや10日妙高にいたい気分です。
- (2) 私が妙高で学んだことは、人とささえあうということです。これからも活動した中で学んだことを生かしていきたいと思います。

8. 取り組み前の課題とその解決策

- (1) 課題
 - (1) 事前・事後指導の一層の充実を図ること。
 - (2) 長期宿泊体験活動を受け入れる自然の家や民宿などと学校との連携を密にすること。

(2) 上記課題に対する解決策

- (1) 事前指導では、教師が目指す子どもの姿が、子ども自身のなりたい姿として意識されていくように仕向ける。事後指導では、具体的な体験を事例として成長している自分。成長したいと感じている自分を意識させる。
- (2) 目の前の子どもの成長を願い、ねらいに沿ったプログラムをデザインすることができるよう、打合せ会の回数と密度を増やすこと。

9. 活動地域の選定で決め手となったポイント

- (1) 国立の宿泊体験施設があり、民宿泊とあわせて長期宿泊が可能であること。
- (2) スキー民宿がたくさんあり、宿泊施設が整っていること。
- (3) 妙高市グリーンツーリズム推進協議会をはじめとして、妙高市が非常に協力的であること。

10. 実施までの経過

- H21. 2 「豊かな体験活動推進事業」への応募を決定
- H21. 4. 25 第1回保護者説明会を実施し、概要を説明、承諾を得る。
- H21. 8 学校・妙高青少年自然の家・妙高市グリーンツーリズム推進協議会での事前打合せ会を実施
現地地下見を実施
- H21. 9. 4 第2回保護者説明会を実施

1. 学校概要	
フリガナ 学校名	カナザワシラツ ハバ ショウガッコウ 金沢市立馬場小学校
全学級数	7学級（内特別支援学級1学級）
全児童数	115名
全教職員数	14人
活動体験の観点から見た 学校環境	<ul style="list-style-type: none"> ・金沢市は、石川県のやや南部に位置する人口45万人の中核市である。 ・本校は、風情ある町並み、伝統工芸や由緒ある寺社など、歴史と伝統文化が息づく、市街地の創立139年の学校である。 ・今年度の市の制作「金沢絆教育の推進」を受け、地域の人・社会・自然と関わる体験活動の充実を図っているが、校区には海や田畑が殆どない。
連絡先	住所 〒920-0831 石川県金沢市東山3丁目9番30号
	電話番号 076-251-7826
	FAX番号 076-251-7827

2. 活動に関する学校の全体計画	
対象学年・児童数	5年生17名、6年生18名 ※児童数が少数であり、かつ5年生と6年生の関係が希薄であることから2学年合同実施とした。
実施時期	平成21年7月7日（火）～10日（金）
活動場所	石川県七尾市能登島
活動のねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・能登島の海や山での自然に関わる体験活動を通して、自然を大切にする心を育む。 ・民俗の方や地元の小学生との交流活動を通して、人と関わり絆を深める。 ・5、6年の異学年が寝食を共にし活動することを通し、協力や思いやりの心、自立心を育む。
児童一人当たりの概算費用	児童一人当たりの費用 35,000円 事業費助成（文部科学省） 29,000円 保護者負担 6,000円

体験活動名	全活動時間 (時間)	教育課程上の位置づけ	児童の活動内容
宿泊体験活動	24	特別活動（学校行事： 遠足・集団宿泊的行事）	海の活動 交流活動他

3. 活動内容	
事前指導	5・6年生合同の集会では、実行委員会を組織し、七尾市能登島についての事前学習や、宿泊体験の目的、なんのためか、どんな活動をしたかなどを話し合い、計画を進めた。 5年担任は社会科や総合の時間の学習との関連を意識し、「田んぼのない馬場、能登島では実際の田を見、田を前にし、米作りに励む人から米作りの話を聞かせてもらおう。」と指導した。 総合の時間で馬場のよさを学ぶ6年担任は「能登島の良さをいっぱい見つけてこよう」と指導した。 5年生、6年生とも 道徳1時間 学級活動4時間
事後指導	<ul style="list-style-type: none"> ・俳句作り（国語1時間 5、6年生各クラス） 「自分の思いを五・七・五に」と感動や記憶が新しいうちにと各学年で取り組んだ。提出された俳句の数やその表現からも、体験が子どもの豊かな心の育成に繋がることが伺えた。これらの俳句は、能登島の皆様に礼状とともに送ったところ、大変喜んでいただくことができた。また、学校でも校内に掲示し、全校に活動の様子や感動を伝えることができた。 ・宿泊体験活動報告会 5・6年各クラスで（5年国語2時間 総合2時間 学活1時間）（6年総合4時間 学活1時間） 「相手を意識して書く話す」という国語科と関連させ、9月の授業参観時に保護者対象の報告会を実施した。体験を通して得た気づきや学びを写真や絵、パワーポイントなどを用いて分かりやすく説明でき、保護者にも好評だった。授業参観後の懇談会では今回の宿泊体験活動に対する保護者の意見も聞くことができた。 ・放送体験（5年 社会10時間 総合4時間） NHK放送体験では「能登島での宿泊体験」をテーマに番組作りをし、県内に放映された。能登島の方々にも見ていただくことができ、さらに繋がりが深まった。 ・「馬場のステキを伝える会」への招待と馬場での交流 「能登島の皆さんのおかげ ありがとう 馬場小にも来てもらいたい」という子どもたちの思いから、創立記念日に行う全校集会に、温かく優しく迎えて下さった能登島の方々を招待した。集会への招待状は6年生が書いた。相手を意識し、文章をしっかりと書くことをねらい、国語科との関連を図った。残念ながら集会はインフルエンザで中止となったがしっかりと準備をすることができた。

平成21年度における「子ども農山漁村交流プロジェクト」取り組みに関する調査票

宿泊先	
地域名	施設名
石川県七尾市能登島	家族旅行村
石川県七尾市能登島	民宿

日程		
1日目 (7月7日)	2日目 (7月8日)	3日目 (7月9日)
里山散策 野鳥観察 巣箱設置 山野草採取 暑い中、鳥の声を聞きながら能登島小6年生と4km歩く 山の上で弁当 ○支援(講師)：能登島スローライフ推進協議会 里山インストラクター 入村式 市や民宿関係者などとの対面式 ○支援：能登島観光対策室 火おこし体験 夕食準備・後片付け 薪集め 飯ごう炊飯カレー作り ○支援：生き生き工房ねねの会 きもだめし 泊：家族旅行村 盛り沢山の活動後、バンガローでゆっくり休む	魚飼育体験と海の生態学習 能登島水族館で裏側のエサ調理の仕事体験 ○支援：能登島水族館職員 スノーケリング体験 海中を覗き遊泳 ○支援：能登島ダイビングリゾート イルカレクチャー 野生イルカウォッチング 目の前で見る野生イルカの姿に釘付け ○支援：能登島イルカ保護委員会 夕食準備・後片付け 海萤観察・民宿との交流 海萤観察は天候や子どもの疲れ具合に合わせて一部の民宿で実施	定置網荷捌き見学 えの目漁港で朝どれ魚の荷捌きや定置網漁網について学ぶ ○支援：えの目大敷網 魚釣り体験 雨にも負けず夢中 能登島小と交流 能登島小訪問 ドッジビーの対戦 夕食準備・後始末 魚捌き初体験 家へのお土産に持ち帰り 民宿との交流 各民宿ごとそれぞれ持ち味を生かす関わり方あり 宿泊者との関係を越えた心と心の交流に子は感動
4日目 (7月10日)	5日目 (月 日)	6日目 (月 日)
農業体験 (ジャガイモ掘り) 田んぼの学習 雨のため室内で話を聞き、田の見学 ○支援：ビオトープ向田 そば打ち体験 昼食用のそばを打つ ○支援：生き生き工房ねねの会 能登島スローライフ推進協議会 退島式 民宿関係者と別れを惜しむ	/	/

4. 体験活動の実施体制

(1) 学校の指導(支援)体制

- ・4月の学級懇談会の折り、保護者に大まかなねらいや予定を知らせることで、保護者と宿泊体験学習の意義などを共有することができ、その後の協力も得られやすくなった。
- ※養護教諭が同行すること、受け入れに慣れた民宿にお世話になることなどを伝え、安全面を強調した説明を行った。
- ・安全で充実した活動にするために、校内支援委員会には、該当の5・6年担任だけでなく複数の学校職員、さらに、保護者やPTA、地域代表の方にも協力を依頼し、連携して取り組んだ。
- ・受け入れ地域の七尾市能登島は学校からバスで2時間もかかる。事前視察する余裕もなかったが、七尾市の担当者の方が窓口となり、学校と各施設等の交渉を進め、各活動に応じた指導者、支援者の確保もしていただくことができた。

(2) 配慮事項等(安全確保のための改善点、衛生上の留意点等)

安全確保

- (1) 民宿に分散し子どもだけで宿泊することに不安があったが、保護者の賛同も得て市や協議会を通じて民宿との事前打ち合わせをしっかりとし、緊急連絡体制(家庭と現地との連絡が取れる体制)を作り、臨むことができた。
- (2) 食物アレルギーのある子については、事前に民宿側に説明し、毎食別メニューにしてもらった。
- (3) 現地では、夜の安全把握のために、引率教師で民宿訪問をした。

衛生上の留意点

雨に濡れた活動の後には、お風呂の用意や履き物の乾燥、水分補給のためのお茶など細かな配慮を数多くしていただいた。

5. 活動の成果

- ・能登島の人たちとの交流を通して、人々との「絆」を深めることができた。
- ・宿泊体験活動以降、学校や家庭で進んであいさつや手伝いをするようになった。
- ・事後学習でみられた、俳句や報告会での表現力から、豊かな体験は豊かな表現力につながるということも実感できた。
- ・自然の中での3泊の長期体験活動の中での自己発見、友だち発見の効果だろうか、9月以降不登校の改善がみられた。

6. 保護者からの声

- ・家を離れての体験活動は、非常に楽しかったようで、さみしかったといわないのにびっくり。
- ・民宿の方とのふれ合い、温かさを笑顔で語ってくれ、貴重な人との関わりが収穫だ。

7. 児童からの声

児童の学んだこと ベスト3

- ・5年生 ①能登島の人の温かさ ②協力することの大切さ ③友達との絆の深まり
- ・6年生 ①能登島の人の温かさ ②海や山への親しみ、興味 ③思いやりの心の大切さ

成長した 変わったと思うこと

- ・5年生 ○協力するようになった ○友達や周りの人の大切さや感謝 ○お手伝いするようになった ○自分でできることが増えた ○挨拶をするようになった ○魚をさばけるようになった

- ・6年生 ○協力するようになった ○友達との絆が深まった ○手伝いを進んでするようになった ○自分のことは自分でするようになった ○家でも進んで挨拶するようになった

8. 取り組み前の課題とその解決策

(1) 課題

- ・体験活動のねらいを明確にし、価値ある活動に絞るなどプログラムの精選をする。
- ・その際「何をどこまで児童に任せるか、現地側に任せるか」など、現地指導者との綿密な打ち合わせが必要。また、打ち合わせに要する時間の確保も必要になる。

(2) 上記課題に対する解決策

- ・活動のねらいを明確化し、プログラムの精選に努める
- ・現地スタッフとの綿密な打ち合わせ

9. 活動地域の選定で決め手となったポイント

施設の充実と海山そして田んぼとバリエーションに富んだ環境

10. 実施までの経過

【5月】

道徳による学習（基本的生活習慣 自主自立 環境）

【6月】

学活（自然や人との絆について話し合い）

学活（活動の計画と準備）

【7月】

（宿泊体験学習）

（お礼状 作文 俳句作り）

【9月】

（報告会 振り返り）

1. 学校概要	
フリガナ 学校名	キョウトフオオヤマザキチヨウリツオオヤマザキシヨウガクコウ 京都府大山崎町立大山崎小学校
全学級数	19学級
全児童数	505名
全教職員数	32名
活動体験の観点から見た 学校環境	(1) 大山崎町の中心部に位置し、町役場や消防署など公共施設が多数ある。また、東海道新幹線やJR東海道本線、名神高速道路などの交通網が南北に貫く交通の要所である。 (2) 街中であるために、自然体験および漁業体験の機会には恵まれていない。
連絡先	住 所 京都府乙訓郡大山崎町字円明寺小字百々18番地
	電 話 番 号 (075) 956-2366
	FAX 番 号 (075) 954-5317

2. 活動に関する学校の全体計画	
対象学年・児童数	5年 88名
実施時期	平成21年6月17日(水)～19日(金)
活動場所	京都府舞鶴市宇野原
活動のねらい	(1) 漁村民宿泊による多様な生活体験を通して、自主性・協調性・連帯感を培い、仲間意識を育む。 (2) 野原漁村特有の体験プログラムを通して、海辺の自然の雄大さや漁業に関わる生活を体感させ、豊かな人間性を育む。 (3) 野原漁村の人たちとふれあい、一緒に生活をする中で、その地域を守るために働いている人たちの頑張りや苦勞を感じ取らせる。
児童一人当たりの概算費用	児童一人当たりの費用 20,388円 事業費助成(文部科学省) 16,388円 保護者負担 4,000円

体験活動名	全活動時間 (時間)	教育課程上の位置づけ	児童の活動内容
野原漁村クイズウォークラリー	2	特別活動(学級活動)	
魚の水揚げ見学	2	社会科	
島めぐり(海辺の生き物観察)	2	理科	
干物作り	2	家庭科	
夜空の星の観察	2	理科	
浜の清掃活動	2	特別活動(学校行事:勤労生産・奉仕的行事)	

3. 活動内容	
事前指導	(1) 活動の概要説明及び班での役割分担や目標の設定 学校として初めての活動になることを説明し、場所の紹介等をし、活動についての見通しをもたせる。 (2) 活動の内容の紹介と、グループの中での担当の活動を決め、保護者にも理解を図る。 (3) 漁業について社会の学習を通して学ぶ。 (4) 干物づくりに向けて、家庭科の調理実習や家庭への課題学習で包丁の使い方を学ぶ。
事後指導	(1) お世話になった方々へ手紙を書き、自己の成長を振り返る。 (2) 体育の表現「ソーラン節」を踊り、大漁旗を借りて、思い出をつなぐ。 (3) 体験活動の発表会を全校集会や保護者の参観日で行う。

宿泊先	地域名	施設名
	京都府舞鶴市野原	民宿シバタ ふじもり 柴田館 まご (野原漁村民宿4軒)

日程		1日目 (6月17日)		2日目 (6月18日)		3日目 (6月19日)	
午前	・移動 (大山崎町→舞鶴市) 観光バス	午前	・漁港(水揚げ見学) ・島めぐり (海辺や海底生物の観察)	午前	・漁師さんから漁業の話聞く活動 ・大漁なべづくり	午後	・移動 (舞鶴市～大山崎町)
午後	・入村式 野原漁村クイズラリー ・夜の散歩	午後	・浜の掃除 浜辺のグリーン作戦	午後	・干物づくり ・小魚釣り		
		夜	・野原漁村一周きもだめし ・星の観察				
	4日目 (月 日)		5日目 (月 日)		6日目 (月 日)		

4. 体験活動の実施体制

(1) 学校の指導(支援)体制

- ①初めての長期体験研修体験であるため、児童・保護者ともに不安(2泊への不安、魚が食べられるかとの不安等)を感じる声もあったが、保護者会の説明会を実施し、児童にむけても、説明を行った。
- ②今まで1泊2日のところを2泊すること、海に行けるという点で、期待感の方が児童には強かった。
- ③引率教員は担任以外は1人しかいないので、要員の補助として学生ボランティアを募る。
※本校は「教員養成サポートセミナー実施校」であることから、滋賀大学に対する協力校として滋賀大学に募集をかけた。

(2) 配慮事項等(安全確保のための改善点、衛生上の留意点等)

- ①安全確保
 - ・学校とまいづる野原漁村交流とで、安全確保(砂浜、磯遊びの場所、民宿の寝室・トイレ、干物作りでの刃物の扱い等)に向けた事前打ち合わせを実施した。
 - ・事前下見を行い、その後の詳細についてはFAX等で連絡を取り合う。
 - ・緊急対応時の連絡系統を事前に十分確認した。
 - ・体調の管理について、個々にアンケートをとり、事前の健康状況について養護教諭・担任が把握をした。
- ②衛生上の留意点
 - ・食物アレルギー等について事前調査をし、食事のメニュー等の事前調整をした。
 - ・食中毒に配慮して、手洗い指導をし、干物づくりについて指導をした。
 - ・弁当類については、事前に腐食の点検を励行し、残飯処理を行った。

5. 活動の成果

- (1) 都会ぐらしの児童にとって、海の自然を満喫でき、興味・関心を高めて意欲的に学習することができた。
- (2) 5感を通して自然に関わる時間をもてたこと、ゆったりと過ごせたことがとても、児童にとってよく、自主性の高まりがみられた。
- (3) 海辺の民宿での食事や食体験は、新鮮で豊かなものであり、魚のおいしさを再発見できた。
- (4) その土地の人との関わりがあり、児童も引率の教職員も心が温かくなって帰ってきた。

6. 保護者からの声

- (1) 民宿での生活体験をすることにより、自分から声をかけてお手伝いをしてくれるようになりました。
- (2) 帰ってきてからは、自分のことは自分でする姿勢が身に付きました。
- (3) 2泊も外泊をしたことのない子どもの親は、そのことで不安なことがありましたが、無事終わったことに安堵しました。
- (4) 魚が苦手な朝と夜は魚がたくさん出たことがとても苦痛に感じていました。
- (5) 家ではほとんど手伝いをしないので、これを機に心を入れ替えて手伝うようになるかと思ったら、そうではありませんでした。

7. 児童からの声

- (1) 今まであまり外で泊まったことが無かったので不安でしたが、友達や民宿の人達と生活することで、不安ではなくなりました。もと長かったです。
- (2) 班活動では、始めはまとまりがなく、なかなかうまくいかなかったのですが、時間が経つにつれて、協力できるようになってきました。いつもと違うところで生活することによりみんなで協力する大切さに気付きました。

8. 取り組み前の課題とその解決策

(1) 課題

- (1) 交流をどのように継続し、発展させていくのかという点。この出会いが単発型で終わってしまうことがとてももったいないと思う。これについては、漁村の方とも、何かいい案はないか、と一緒に頭をひねっていた課題である。
- (2) プログラムの開発。晴天のプログラムはたてやすいが、雨天の時のプログラム作りが大変であった。
- (3) 長期の宿泊に向けての学校の支援体制を組むにも人がいない。担任は夜中も起こす児童もあり、3～4時間の睡眠である。
- (4) 地域の特色を生かしたプログラム作りの大変さ。
- (5) 補助の決定しだいで動く不安定な学校行事（前年度からの準備はできなくて、決定後に学校の組織が動くという大変さ）

(2) 上記課題に対する解決策

- (1) 宿泊前後の地元との交流をどうつなげるのか、地域の組織としての支援体制がまだ整備されていない。
- (2) 雨天時のプログラムも細かく考えて準備をして当日を迎えた。6月中旬と言う、時期的にも雨の確率の高いこの時期に、雨天時を想定しないわけにはいかない。島めぐりのように雨天だと絶対に不可能なものがあった。そうなった場合、日程を入れ替えるだけでできるものもあればそうではないものもある。雨天時の代替案として、モビール作りやキャンプファイヤーの代わりにキャンドルファイヤーなどを考えていた。
- (3) 学校の支援体制について。担任と養護教諭は全日程引率をしたが、2泊では学生ボランティアを募り3人が参加し、夜尿の対策などに協力をしてくれた。他の教師にも引率をお願いし、常に6～7人の体制で臨んだ。しかし、全日程を同じメンバーで取り組んでいるわけではなく、意思疎通や申し送りがいまいきかかないこともあった。学校現場からそれだけ多くの教師が抜けることは不可能なこと。保護者からも、民宿ごとに教師がいるということで、なんとか安心してもらえたような実態もあり、これ以上、手薄になると、保護者の賛同は得にくいのではないと思う。
- (4) 近くに川や山があっても、海の体験がない児童が多い。そのため、できるだけ自然体験の活動（島めぐり・浜辺の清掃活動・漁村のきもだめし等）ができるように考えた。2泊3日という大きな学校行事である。1泊2日の宿泊学習のように取り組みの時間に追われるのではなく、ゆったりと過ごす時間ができるように日程を組む時に、午前・午後と2つの大きな枠で活動内容を構成した。
安全面では、養護教諭の引率で問題があった。3日間宿泊体験活動の引率で行くために、学校で1人しかいない養護教諭が不在ということになる。この間は学校の教職員で対応した。次年度は、町の教育委員会から、その期間、保険師の方の派遣予定である。
- (5) 24時間体制で子どもへの指導・対応をしていくことになるので、引率教員に過剰な勤務を強いている。子どもにより体験をさせてやりたくて、工夫を重ねている。
- (6) 4月に新担任が決まって動くことは同じであるが、決定の時期が遅い。決定したら、町教育委員会からすぐに連絡をもらって校内体制をつくっていった。

9. 活動地域の選定で決め手となったポイント

- (1) 本校は京都と大阪の中間に位置する都会であるため、京都府の受け入れ地域の中から日頃なじみの薄い海の体験をさせたかった。
- (2) 受け入れ体制は未整備であったが、受け入れは充分可能だということであった。

10. 実施までの経過

- 平成20. 2 校長が「農山漁村におけるふるさと体験推進校」に応募することを決める。
- 3・10 職員会議で、来年度の5年生の宿泊について、話を行う。
- 4・6 新体制の職員会議で日程等の検討にうつる。
文部科学省からの内定を受け取る。
- 4月下旬 決定の通知を受け取るとすぐに、まいづる野原漁村交流推進協議会と連絡をとる。
現地と電話やFAXによる連絡を取り合う。
- 5月 現地の下見、保護者説明会、児童に向けて説明を行う。
※2泊で実施の理解促進
※受け入れ地域の写真での紹介
※医療機関、安全・緊急体制の説明
※自然の豊かさ